伊勢物語私注

――一七段～二二段――

原　國人

一

『伊勢物語』二一段は、『伊勢物語』の全章段の中で最多の所載歌を持っている力作にもかかわらずあまり人気がなく、成立論の場で問題にされるぐらいで正面切って取り上げた文章を、私の管見の故もあって、ほとんど見たことがありません。さらに言えば、一六段の紀有常関係章段と二三段の筒井筒章段との間に挟まれた一七段から二二段までの章段にもこの傾向が見られます。その原因の一つには、一六段と二三段がともに説話的要素が濃厚であるのに対して、一七段から二一段までの諸段は、歌の存在感の方が説話的要素よりも強いと云うことがあるのかもしれません。

歌物語というのは、簡単に云ってしまえば、「歌語り」と「打聞」とに関係のあるジャンルであり、「平安時代

における物語の様式の一つ。和歌を中心として構成された短編物語。また短編物語集。『源氏物語』などの本格的な物語を生む過渡的形態で、日記、私家集その他にも歌物語的性格があるとされる。」（『精選版日本国語大辞典』）などとされるものですが、『伊勢物語』を短編物語ととらえると、各詞章の一つひとつは、スナップショットのような、ある瞬間・場面を切り取ったものから、きわめて説話性の強いものまで様々の性格をもっています。そうした中で、初段の「春日野」や九段とその周辺の「東下り」、あるいは六五段の「在原なりける男」の宮中でのゴシップめいたもの、さらには六九段の「斎宮譚」などのように事件性の強いものが、その背後にある史実などへの興味があって、私を含めた多くの享受者を引きつけてきたのではなかったかという思いがあります。ところが最近は、私自身が年老いた所為でしょうか、陰湿な政争や激しい恋愛などといったドラマチックなものよりはもう少し人の世の日常の生活そのもの中にあるささやかな出来事、人生のつくりだす襞を細やかに描き出している章段の方へと関心が移ってきて、地味な章段である二一段などが、思いのほか気に掛かるようになり、それが本稿を書こうする契機となっていることは確かです。ただ、それだけではなく、後で少し触れますが、片桐洋一の大著『伊勢物語全読解』（二〇一三年一二月和泉書院）の二一段の「まとめ」を読んだ時にある種の違和感を感じたことにもあります。なお、初めにお断りしておきますが、本稿で用いる『伊勢物語』の本文は、武田本系統の松井簡治博士旧蔵、静嘉堂文庫蔵による山田清市編著『伊勢物語影印付』（一九七五年四月訂正再版白帝社）の影印をもとに筆者が整定したものです。また、本稿で扱う一七段から二二段の前後の一六段・二三段にはそれぞれ筆者に「文学と歴史の間―『伊勢物語』を軸として」（室伏信助編『伊勢物語の表現史』（二〇〇四年一〇月笠間書院）「『伊勢物語』二十三段再考」（「中京国文学」第二五号二〇〇六年三月）がありますので、ご参照いただければと存じます。

二

二一段を取り囲む章段群を簡単に見ておきましょう。まず、一七段から、

年ごろ、訪づれざりける人の、桜のさかりに見に来たりければ、あるじ、あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し、

けふ来ずばあすは雪とぞ降りなまし消えずは有とも花と見ましや

まず、気になるのが、『伊勢物語』の各章段のはじめにある「むかし」の語を持たない書き出しであるということ。単なる書き落とし、筆写、転写をしていく間に生じた誤りがそのまま受け継がれてきたのかどうか。それとも何らかの作為があるのかどうか。定家本系統の諸本は見る限り「むかし」がない。誤写と考えたならば、補ってもいいはずなのだが、補っていないと言うことは、もとの本を忠実に写そうとする親本尊重の強い意志の表れか、「むかし」を必要としない、詞章自体のもつ強い論理があるのか、あるいは読み手の方に「むかし」がなくてもよいとする何らかの要請があったのかが気になるところです。何はともあれ、眼前の本文には「むかし」がない。とするならば、「むかし」を補うという恣意的な操作をして読むか、ないことを前提として考えて読むかのどちらかが問われることになります。

ところで、この詞章の所載歌は『古今和歌集』巻一「春上」に、

さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人のきたりける時によみける　　よみ人知らず

62あだなりとなにこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し　　なりひらの朝臣

63けふこずはあすは雪とぞふりなましきえずありとも花と見ましや

と掲載されています。いうまでもなく『古今和歌集』の詞書きには、例外的に八七四番歌の「寛平御時に」のような時制を規定する表現はありますが、「むかし」とか「むかし、男」といった表現はありません。このことが、この一七段の成立の一端を示しているとする説もありますが、本稿で成立論を展開する意図はありませんので、これ以上はおいておきます。

次に気になるのが、「あるじ」です。例えば、『古今和歌集』春上の四二番歌の詞書の中には、傍線部のような用法があります。

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、程経て後いたれりければ、かの家のあるじ、「かくさだかになむ宿はある」と言ひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折てよめる　　貫之

42人はいさ心も知らず故里はは花ぞ昔の香ににほひける

「初瀬」は言うまでもなく。奈良県桜井市初瀬（はせ）、伊勢街道の要衝の地であり、長谷寺の門前町で参詣のための宿などが多くあった場所。梅花と桜花、花の種類は違いますが、久々に訪れた場所での、「あるじ」と「客」との当意即妙のやりとりというシチュエーションは一七段と共通しています。

「あるじ」というこの語は、男性に対しても女性対しても用いられる語で一七段の「あるじ」に関しては、諸注、「男」か「女」に分かれていています。『伊勢物語』の中には、友情譚もあり、この段の直前の一六段が紀有常と「ねむごろにあひかたらひける友だち」との友情譚であることとの結びつきを考慮すると男性同士のやりとりである可能性も十分ありますし、これをＢＬ小説のはやいものと捉えてもいいのですが、当時の男女関係は、基本的には、訪れるのが男性であり、待つのが女性というのが基本的なパターンと言うことになっています。そのことを重視すれば「あるじ」は女性と言うことになります。そこで『伊勢物語知顕抄』のように「いゑあるじはありつねがむすめ。まれ人はなりひらなり」といった解釈まで出て来るのです。確かに、女性の方から歌を詠み掛けるのは、異例であるとする説などが一般的な解釈となっています（鈴木日出男『伊勢物語評解』二〇一三年六月筑摩書房）。しかし、果たしてそうでしょうか。続く一八・一九・二一・二二段は女性の歌から始まっています。とすれば、一七段から二二段までのグループの中では、取り立てて異例であると言うことも言えなくなります。ただ、所載歌に「あだなり」という語が使われていることはは無視できないと思います。この語は、「徒なり」「婀娜なり」などの字を当てることが考えられます。はかなく頼りない等の意だけではなく「色気」をも感じさせる語感を持つ形容動詞。ここでは散りやすいの意で、桜の花の散りやすいことだけではなく、浮気心をも含めている。登場人物二人はともに「あだなり」と評判の立つ人であり、「色好み」と言うよりは「好き者」の要素があったことをうかがわせています。

「まれなる人」は「まれびと」を連想させる表現。しかし「まれなる人」であって「まれ人」ではない。ポイントは「桜のさかり」の時期を的確に知り訪れてきていること。

「桜花」は、女が自分自身をたとえたものととるのかどうかですが、詞書の「桜のさかりに見に来たりければ」とあることで観桜をめぐるエピソードとすれば、喩ととる必要はないと考えられます。

一七段の贈答歌を考えるときに、次の二つ『古今和歌集』所載歌が参考にならないでしょうか。一つは、

雲林院にて、桜の花の散りけるを見てよめる　　承均（そうく）法師

75さくらちる花の所は春ながら雪ぞふりつつ消えがてにする

雲林院の「雲」（空にあるもの）「さくらの花」「雪」という景物の組み合わせはさておき、桜の散る所（地上）の様子を雪の「むら消え」とする喩と考えてもよいのですが、一七段の所載歌の「桜花―雪」という喩に通じるものがあります。また、次の貫之歌は、一七段の後に付されてもいいと考えられるものです。

あひ知れりける人のまうで来て、帰りける後に、詠みて、花に挿して遣はしける

78ひと目見し君もや来るとさくら花けふは待ちみてちらばちりなむ

三

次に一八段を見ておきます。

むかし、なま心ある女ありけり。男近うありけり。女、歌よむ人なりければ、心見むとて、菊の花のうつろへるをゝりて、男のもとへやる。

紅にゝほふはいづら白雪のえだもとをゝにふるかとも見ゆ

おとこ、しらずによみによみける。

紅にゝほふがうへの白菊は折りける人の袖かとも見ゆ

一七段からの繋がりから云えば、まず、気がつくのが、花を「雪」に喩える修辞法であり、あとは、贈歌に対する答歌の切れ味のよさでしょうか。

登場してくるのは「なま心のある」女性でした。この「なま」は若い、中途半端の意で、知ったかぶり。近世的表現をすれば「半可通」。初段の「なまめく」とは違い、ここでは「艶」に近いニュアンスを含ませて解することも可能です。さらに言えばは遊女（あそびめ）的存在とも見ることが出来ます。（原由来恵「『伊勢物語』―研究の現在と展望」《妹能好信・渡辺泰宏・久下裕利編『伊勢物語の新世界』二〇一六年三月武蔵野書院所収》によれば、初段の「女はらから」の背景に遊行婦女の姿を窺うことも可能です）。あるいは、『源氏物語』「夕顔」巻のエピソードの前哨的なものなのでしょうか。

「近うありけり」は、女の家近くに男の家があったのか。それとも方違えかなにかで男が女の家の近くに寄ったのでしょうか。その機会をとらえて、女の方からちょっかいをだしたのでしょう。伝民部卿局筆塗籠本『伊勢物語』一九段では、「菊」が「梅花」に替わり次のようになっています。

昔、なまごころある女ありけり。男、とかういひけり。女、哥よむ人なりければ、こころみむとて、梅を折りてやる。

くれなひににほふはいづらしら雪のゑだもたわわにふるやともみゆ

男、しらずよみによみけり。

くれなひにほふがうゑのしら雪はをりける人のそでかとぞみる

諸注、場の設定を想定する場合に『貫之集』の、

近隣なる所に方違へにある女のわたれると聞きてあるほどに、ことにふれて見聞くに、歌詠むべきひとなりと聞きて、これが詠まむさま、いかで心みんと思ふと、いはんとの心なりければ、深くもいはぬほどに、かれもまた心みんとや思ひけん、萩の葉もみぢたるにつけてをこせたり。あはせて十首、

女

秋萩の下葉につけてめにちかくよそなる人の心をぞみる

返し

世の中の人の心をそめしなば草葉の露も見えじと思ふ

女

下葉にはさらにうつらでひたすらに散りぬ花と成りやしぬらん

返し

散りもせずうつろひもせず人を思ふ心のうちに花し咲かねば

（以下略）

を引いています。この贈答歌群は『拾遺和歌集』雑秋にも掲載されていますが、それはともかくこの「女」は一体どういう人物であったのでしょうか。「女、歌よむ人」は塗籠本のように「女が歌詠む人であった」とも「女が、男は歌詠む人であったので」ともとれますが、この女性自身は「なま心」と規定された人物でした。とするならば、『古今和歌集』「仮名序」の、

やまとうたは、ひとのこゝろをたねとしてよろづのことの葉とぞなれりける。

に従えば、「女」の歌は「なまこゝろ」詠まれたものであったことなります。そこで、女は中途半端に歌をもてあそぶ人で、その「女は、男が本格的に歌を詠む人であったので」ととっておきます。

「紅にゝほふ」の女性の歌。「にほふ」は元来色が際立つ意味でそれが影響して他のものが照り映える、また嗅覚でも用いられる意になったものです。「かおる」は「香」に限らず全ての物の気が漂うことを言ったのですが、次第に「にほふ」の意に似てき、現在では「香」は好ましい香りに限定されるようになり、雅語的に用いられる

ようになったとされています。「白菊」については、精選版日本国語大辞典には「①白い菊の花。白い花が咲く菊。②襲（かさね）の色目の名。表が白。裏は蘇芳。蘇芳菊。秋に着用する。」とありますが、襲の色目に関しては異説多数。同書「移菊（うつろひきく）」の解説には「表は中紫裏は青。一説に裏は白または黄。秋に用いる」。白菊襲を「表白。裏萌黄」とする説もあります。「枝もとを〻に」の「とを〻に」は形容動詞なり活用連用形。「撓わに」の意。しなうさま、たわむさまをいい、中古にはほとんど用例を見出すことが出来ないのですが、『万葉集』（巻十・二三一九番歌）には次のような例があります。

あしひきの山道も知らず白檀の枝もとををに雪の降れれば

なお、菅原道真の「寄二白菊一四十韻」（『菅家文草』巻四）は讃岐守として赴任中の作で京の宣風坊の書斎の庭に栽培していた菊の花を思いやって、讃州客舎の押さえがたい不満を述べた全四百字の大作ですが、その中の、京の書斎を自画自賛した部分には、「菊花」を「雪」に喩えた次のような、句があります。

乍看珠顆拆　乍（たちま）ちに看る珠なす顆（つぶら）の拆くことを　真珠ようなつぶらな蕾が開くのを突然に見付ける
爭賞素窠翻　爭ひて賞づ素き窠（しろはなのつしべ）の翻（ひるがへ）ることを　白菊の花弁が舞翻って開く様子を争い賞美する
蟬翅迷施粉　蟬の翅（つばさ）の粉（はふに）を施せしかと迷ふ　白菊の姿はその薄い羽に白粉を引き施したかと疑われる
蜂鑽閙著痕　蜂の鑽（きり）の痕（あと）を著（つ）くるに閙（いそがは）し　蜂は菊の花に飛んできて針で花の蕊に痕を着けるのに忙しい
地疑星隕宋　地は星の宋に隕（お）ちたるかと疑ふ（存疑）　白菊の様は天井の星が宋の国に隕ちて輝くよう

庭似雪封袁　庭は雪の袁（えん）を封たるが似し　白菊の咲く庭は、白雪が袁山を埋めて降り積もったようだ。
紫襲衣藏篋　紫を襲ねて衣は篋（こころもはこ）に藏む　白菊の花の姿はまるで紫を襲ねて衣装箱たたみ納めたようだ
香浮酒満罇　香（にほひ）を浮べて酒は樽に満てる　白菊のにおいはまるで酒が酒樽に満ちあふれているようだ

あるいは、また、「菊の花のうつろへる」『古今和歌集』秋下には菊の歌が二六八番歌から二八〇番歌まで十三首続いています。その中の二六八番歌ですが、この歌は『伊勢物語』の五一段所載歌と同一歌です。

以上のように、女の歌の周辺を考えてみたのですが、それでもこの歌にはいくつかの問題点として指摘されるものがあります。簡単に言ってしまえば、

①白菊の「うつろい」を「くれなゐ」と表現するのには無理があります。塗籠本『伊勢物語』一九段のように「梅花」ならば十分通用するのですが。

②「いづら」は歌語としては不適な口語的表現。確かに『万葉集』には「いはた野に宿りする君家人の伊豆良とわれを問はばいかに言はむ」（巻一五、三六八九番歌）といった表現もありますが、これは話し言葉を取り込んだものですから、歌語とするには不十分でしょう。

③「とををに」はこれも『万葉集』などには見られますが古い表現であり、雪の重さを表すのならともかく白さの表現としてはどうでしょうか。

といった難点があり、古風で洗練されていない未熟な作品ということになります。

これに対して男は、「しらずに」、つまり男を試みようとして歌を贈ってきた女のたくらみを十分わかっていながら、そのことをわからない風を装って返歌をしたのでしょう。

返歌には、「紅にほふ」「かとも見ゆ」と贈歌の表現を踏襲していますが、これは贈答歌においては贈歌の用いた言葉を採り上げて返すというごく基本的な作法でしょう。ただ、その作法を初句と結句に用いてことさら強調しているのは念を入れすぎたというよりはもはや嫌みであり相手を見下したものともいえましょう。

『伊勢物語』には、「みやび」を中心とする美意識があり、ある基準から離れた出来事やものに対しては、例えば十四段のように拒否をする姿勢を通しています。そこには和歌のあるべき姿を考えようとする強い姿勢も見られますが、こうした点が後世の連歌師などによって評価された一因で、例えば今川了俊（貞世）の『了俊要弁抄』に「三代集の外にも常に抄物を見るべき事」として、

三六人家集等、伊勢物語、清少納言枕草子、源氏物語等なり、此等は歌心必ずつくものなり。

などとあげられています。物語・説話的な面白さから言えばこの詞章は、あまり高い評価をあげることは出来ませんが、歌論への接近という観点からとらえるならば、一定の評価を与えていい詞章なのではないでしょうか。登場する女性の行為に対して、『伊勢物語』は時々手厳しい評価を下すことがありますが、この段などもそうした傾向の漏れ出たものともいえます。

四

次は一九段です。

むかし、男、宮仕へしける女のかたに、御達なりける人をあひしりたりける。ほどもなくかれにけり。おなじ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものかとも思たらず、女、

雨雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

とよめりければ、男、返し、

雨雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

とよめりけるは、また男ある人となむいひける。

まずは、「宮仕へしける女のかた」が問題となります。男が宮仕えをしている貴人の北の方の所でよいと思われますが、『伊勢物語』には貴人に仕える男女の間が話題として採り上げられることがあります。おそらくはこの作品の享受者層の問題とも関わってくるのでしょうが、後宮だけではなく、摂関家とはいわないまでも、『落窪物語』などのように、一般貴族の北の方周辺にも、文藝に関わるような活動があって、この章段も、その先駆的のものなのかもしれません。「御たち」の「たち」は複数を示すのが普通ですが、個人の場合にも使われて敬意を示します。一種の朧化法といってよいでしょう。

「あひしりたりける」は男女の仲となったということ。「けり」は基本的には過去でですが、ある事実に気づいたことを示したり、またある事実をそれに気づいた者と例えば表現者との間にある距離感をもしめす助動詞です。そうなっても、気がつくと「かれにけり」と言うわけです。「かれ」は「離(か)る」の連用形です。

「女のめには見ゆるものから」の「見ゆる」は「見」＋上代の助動詞「ゆ」。「聞こゆ」や「おぼゆ」などと同じ組成です。「ゆ」には、自発、受身、可能、尊敬などの意がありますので、それらの意味が反映されます。自然

と男の様子が目に入ってくる。見ることができる。目についてしまうなどの意を読み取ることになります。そして、これは後の贈答歌をどう読むかにも関わってきます。

男の歌の中の「そら」は「中空」でどちらとも決着出来ない中途半端な恋の状況をさしています。「はやみ」の「み」は形容詞などの語幹などにつき、原因・理由を示しています。

「またおとこある人なむといひける」。これは男から「離れ」ていった原因の種明かしとなっています。いわゆる「後人の補注」的なものです。この一文がつくことによって、女性への非難が浮かび上がってきますが、少し、気になるところがあります。というのは、「男」には、状況改善するだけの魅力がなかったのか。あるいは、女を自分に引きつけるための手練手管としての無視であったのかという点です。その結果、女が歌を贈ってきた、だからだめ押しをして、あなたの全てをわかっていますよ。これからはあなた次第ですよと女に迫ったものともとれます。とすれば、「かれにけり」という状況がこの歌の後さらに変転してゆくことにもなります。そこで、この「後人の補注」的な一文がある方がいいのかどうかが問われることになります。もう少し言えば、「女」は同じ職場・生活圏の男性と男女の関係になる前から、別の男性と親しかったのか、それとも男女の関係になってからさらに別の男性との関係が生じたのか、疑問は様々に出てきます。女が「好き者」であったのか。他に男性がいるのにそういった関係なった男の方が「色好み」だったのかあるいは双方がそうで単なる火遊びの結果がこの章段であったのか。こうした想像をすること自体下世話な話なのですが、それを和歌の世界に昇華しているところに一つの大人の文藝としての面白みがあるとも言えましょう。

この章段の贈答歌は、『古今和歌集』巻十五恋五に、次のように載せられています。

業平朝臣、紀有常がむすめにすみけるを、うらむることありてしばしのあひだ、昼は来て夕さりは帰りのみしければ、よみてつかはしける

784 天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目にはみゆるものから

〈はるかに遠くへだった大空の雲のようにあなたとはよそよそしい中になってしまいました。とは申すものの目に見えるところにはいらっしゃいますが〉

返し　　なりひらの朝臣

785 ゆきかへりそらのみしてふることはわがゐる山のかぜはやみなり

〈行ったり戻ったり、落ち着くことも出来ずにぼんやりと空にばかり居て過ごしているのは、雲の私が居るはずの山の風であるあなたが激しすぎるからですよ〉

とすれば、紀有常を通してかすかながら一六段との関連性も浮かび上がってきます。

五

それでは、二十段に話を進めましょう。

むかし、男、大和にある女を見てよばひてあひにけり。さてほどへて、宮仕へする人なりければ、帰りくる道に、弥生ばかりに、楓のも紅葉のいとおもしろき折りて、女のもとに道よりいひやる。

君がため手折れる枝は春がらかくこそ秋の紅葉しにけれ
とてやりたりければ、返事は京に来着きてなむ、持てきたりける。
いつのまにうつろふ色のつきぬらむ君が里には春なかるらし

平城から長岡京そして平安京への遷都は、藤原種継の暗殺事件や薬子の乱が示すように必ずしも順調に進んだわけではありません。旧都から新都へすべてが短時間の間に移動したわけでもないし、当初には、旧都に自宅をもち、新都での仮住居で仕事を行うということは、しばしばあったのでしょう。遠距離恋愛、単身赴任などの話は現在の出来事とは限らなかったのでしょう。「大和にある女」の背景には、こうしたさまざまの事情が考えられます。その女性に男は、「見てよばひてあひにけり」となった。男が女に積極的に言い寄って結ばれたのでしょう。初段「春日野の恋」の後日談の一つとも読める仕掛けとして「大和にある女」は作用します。そうした男性であればこそ、女性のもとからの帰りに、後朝の歌を詠みます。ところが、この歌、気を利かせたつもりが曲解を生じさせる隙だらけのものとなってしまいました。「楓の紅葉」がまず引っかかりました。春なのに珍しく紅葉していたのでしょう。しかし、男の歌で「秋」を出したのは、歌の作法としては、どうでしょうか。「秋」は「飽き」に通じ、「春」は「芽も張る」もかけたのでしょうが、ちょっと短慮でした。「楓」は春に小枝の先に四、五弁の小花をつけることがありますが、それなのに、「紅葉」を出したのは時季外れ、もっと言えば二人の気持ちがずれていることを暗示したことになってしまいます。女性はそこを見逃しません。女性からの返歌は、「京に来着きて」、つまり男が京の住居に帰り着いたのと同時に届くように女は仕掛けたのです。男が時節に似合わない状況を歌にして贈ってきたのに対して、返歌のタイミングとしてピタリとなるように合わせてきます。その

上で、「移ろふ色」と来ますが、これは男の気持ちが「うつろふ」のを揶揄し「色」で男の新しい恋人でもできたのと怨じてみせます。そして「君がさとには春なかるらし」と追い打ちをかけます。実はこうしたやりとりの背後には、「平城帝の御歌」である次の『古今和歌集』春下九十番歌があるのではないかと考えられます。

90故郷と成りしならの宮こにも色はかはらず花はさきけり

新京の男の新しい住居には、私に飽きた「秋」しかないのだから、当然「春」の花はないのでしょうよ。「らし」は根拠のある推定。「平城帝の御歌」を背後に置くことで、この詞章は、二段の「平城の京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に」を窺わせますし、一七段とその背後にある貫之歌にも通じるものがあります。

六

いよいよ次は二一段です。

むかし、おとこ〇女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるをいかなる事かありけむ、いさゝかなることにつけて、世の中をうしと思て、出でていなむと思て、かゝる哥をなむ詠むて、ものに書きつけゝる、

出でていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人は知らねば

と詠みを聞きて、出でていにけり。この女かく書き置くきたるを、けしう心置くべきこともおぼえぬを、何によりてかからむといといたう泣きて、いつ方に求めゆかむと門に出て、と見かう見けれど、何処ばかりともおほえさりけれは、帰り入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちきりてわれやすまひし

といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらむ玉葛面影にのみいとど見えつつ

この女いと久しくありて、念しわびてやありけむ、いひをこせたる。

今はとて忘るる草くさの種をだに人の心に蒔せずもがな

返し

忘れ草植ふとたに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし

また〳〵ありしよりけにいひかはして、おとこ

忘するらんと思ふ心の疑ひにありしよりけにものぞかなしき

返し、

中空に立ち居る雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれと、をのが世ゝになりにければ、うとくなりにけり。

男と女の間柄は「かしこく」と書かれるものでした。この語「畏し（かしこ）」は普通は、程度のはなはだしいこととさ

れますが、自分自身に好都合なように案配してものごとを取り計らうといった抜け目のない様子をいう場合もあります。後に「こと心なかりけり」とあることから考えるとお互いに尊重し合ってとか敬愛しあっての意にとっておくことが無難ではないでしょうか。その「こと心」は「異心（ことこころ）」で、他の異性に心を動かすようなこと。浮気心。あるいは倦怠期の気の緩み。ふとしたことから生じた夫婦間の緊張関係の破綻かなどといろいろ憶測することは出来ますが、はっきりとは特定されていません。だから「いかなることかありけむ」ということになるのでしょう。「けむ」は過去の出来事に対する推量を示しており、それも語り手の視点からの推量です。聞き手に共感を促す表現。ここではその特定されないことが実は一番肝心なことで、自分自身にもわからないような、不定愁訴が「世の中」つまり夫婦の間に生じてきたのをこの女性は感じたのでしょう。「世」には、世間・世界、あるいは過去・現在・未来などの時空の広がりを示す語ですが、ここは二人の世界。その生じてきたことは具体的な出来事はなくて「憂し」という感覚あるいは感情で、身辺の些細なものごとが思い通りにならない状態を嘆く心情やそのような心情にさせる状況があったのでしょう。夫婦の間柄について相方のことが原因でということとは限らない。今の状況が自分の人生であり、そのこと自体を「憂し」と感じてしまうのでしょう。アパシーといったものではなかった。そうであるならば、歌を書き付けたり出奔したりするエネルギーはもはや失われているはずですから。

「もの」に歌を書き付ける行為、「もの」は何でもいいのです。そばにある柱や壁あるいは屏風などでしょうか。『大和物語』初段には宇多天皇が退位する時に伊勢の御が弘徽殿の壁に歌を書き付けそれを見た帝がその傍らにまた歌を書き付けたことを載せています。『源氏物語』の真木柱は、髭黒大将と玉鬘の事情を知った外祖父の式部卿宮に母と一緒に引き取られる際に、住み慣れた屋敷の柱の干割れたる隙間に檜皮色の紙の重ねに和歌を書き、

笄の先で差し込んで去って行きました。

「出ていなば」の歌。出て行った女が、男に残した歌。男が出て行ったとする説もありますが、後の記述からはそうはとれません。歌の中の「心かるしといひやせむ」「世のありさまを人はしらねば」という表現には他者の目が完全に意識されており、他者を介在させることで浮かびあがってくる「自我」があります。「人」を夫ととってもまた身の回りの人達あるいは世間一般の人ともとることが出来できますが、その人達の存在や価値観が「憂し」の気分を醸成させているのでしょう。この歌『古今和歌六帖』四「別・かなしび」には、

出ていなは心かろしといひやせん世のありさまを人は知らずて

とあり作者を「なりひら或本」としています。理解されない自分というのは、『伊勢物語』の中にはいくつか描かれており、例えば、次の一二四段などは、その最たるものでしょう。

むかし、おとこ、いかなりける事を、思ひけるおりにかよめる。
思ふ事いはでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなければ

「けしう心置く」以下は男の心中思惟の辞。置き去りにされた者が感じる、喪失感を「怪（け）し」で示しています。「心置く」は相手の気持ちに添えない距離感、「怪し」と重なることで不安をともなった警戒感があります。「と見かう見けれど」は四段に「去年を恋ひて行きて、立ちて見、居て見、見れど」という表現がありました。あち

らを見こちら見る、戸惑い落ち着かない状態をしめす慣用的な表現です。

「思ふかひなき世」これは男の独詠歌。「なりけり」の「けり」は詠嘆といってしまえばそれまでですが、こうして女に捨てられてしまって初め気がついてみると私たちの夫婦仲というのは「相手のことをいくら思っても相手に尽くしてきたのにそれは何の甲斐もないものであったのか」という、悔悟の思いと自分のことを少し客観視するような感じがあります。だから次に「あだ」という語が導かれるのでしょう。ここの「あだ」は「徒」に近いもので空虚、不誠実の意。対義語として、「まめ（誠実）」が考えられます。「われや住まひし」の「や」は反語。「住む」はともに過ごしてきた結婚生活をさす。「あだに結婚生活をしてきたのだろうか。いやそうではなくまめにくらしてきたはずだ」の意。少し男に対して厳しい言い方になりますが、ここには事態の原因を考えてこれまでの自己の「生き方あり方」を真摯に見つめ相方の関係の中で相手の「生き方あり方」に寄り添っていこうとするよりも、自分の「生き方あり方」にこだわり相方の「憂し」を理解し肯定しようとする姿勢が見えてこず、自己憐憫に沈淪している姿だけが浮かびあがってきます。

「人はいさ」の歌、これも男の独詠歌。「いさ」は下に「知らず」などの否定表現を伴う場合には、かなり強い意志の表明ですが、ここは判断できず迷っている気分から「さあどうでしょうか」などという表現。「思ひやすらん」の「や」は疑問。「玉鬘」は髪飾りで頭に掛けることから「掛け」の枕詞とされ音のつながりで「影」や「面影」などにもかかっていきます。「面影」は記憶に残っている姿。ぼんやりと「ながめている」男の眼前に、現実にはいないはずなのに、あたかもあるように目の前にちらつくこと。

「念じわびてやありけむ」の部分「念じわびてにやありけむ」とする本文が多い。先の「いかなることかありけむ」の「けむ」に同じ。語り手の視点からの推量。聞き手に共感を促す表現です。「念ず」は我慢する、堪え

る の意で、「わぶ」は補助動詞的に用いられたもの。上の動詞の内容を「……しかねる」意。別れて出奔して独り身になったことが精神的にも肉体的にもあるいは生活一般に於いてもつらい。「にや」の「に」があったとすれば、これは断定の助動詞であるので、「女」は確実に「念じわびている」それを語り手が「ありけむ」で推量したことになり、「に」がない場合には「女」の状態そのものを推量したことになります。

「今はとて」は女からの贈歌。問題は「忘るる草の種」を誰が蒔くのかと言うこと。ここでは男。「忘るる草」は「忘れ草」、萱草のこと。「だに」は「せめて……だけでも」の意で「蒔かせずもがな」の「もがな」は願望。「蒔かせない」ことが願いなのです。ところで、「今はとて」を用いた歌に『竹取物語』にかぐや姫が月に帰る時に、帝に残していた次の歌があります。

今はとて天の羽衣きる折ぞ君をあはれと思ひいでける

「今はとて」というのは、いよいよこれが最後というニュアンスが強い辞です。だからこそ、女は、「せめて男がこれが最後だ、そう思い切って私のことを忘れるために忘れ草の種をまくということだけはしないようにしてね、お願い」といった感じでしょうか。「忘れ草」は恋の苦悩や憂鬱な気分を忘れさせてくれるという花のこと。『万葉集』巻四には、大伴家持の次のような恋歌が載せられていています。

大伴家持、坂上家の大嬢に贈る歌二首　離絶すること数年、また会ひて相聞す

727忘れ草我が下紐に付けたれど醜（しこ）の醜草言（くさこと）にしありけり

728人もなきくにもあらぬか吾妹子とたづさはり行きてたぐひて居らむ

「忘れ草」の持つ効能を発揮させるためには下紐に結い付けることが必要でした。そこには〈性〉の匂いすら感じさせます。

「忘れ草」の歌。これは男の返歌で、「忘れ草」を植えるのは女の方です。「……ば……まし」という反実仮想の構造。「せめてあなたが忘れ草を植えたとだけでも聞いているのであれば、あなたが私のことを思っていたのかと知りもしたであろうのに、あなたが忘れ草を植えたとは知りもしなかったので、あなたが私のことを思っていたなんてわかるわけないでしょう」ほどの意。答歌の作法として「忘るる草」に対して「忘れ草」。「だに」を同じく使用し「忘れ草」を植える主語を取り替えているなどは評価していいと思います。ただ、このように切り返しが出来るのであれば、才気煥発なところを、結婚生活の間にもう少し見せておいてもよかったのでは。惰性に流されていた所に男に油断があったのではないかとも思わせる一首です。こうした贈答歌のやりとりだけでも、なるほどと思わせるので、その結果「またく」以下を必要ないとする説もあります。去って行った女に男が見事に切り返したとして、そこまでで確かに区切ることは出来ますが、しかし以下の顛末を記さなければならない必然性が、この詞章を作り出した人物にはあったのではないでしょうか。

「ありしよりけに言ひかはして」男と女の仲は復活します。以前に比べて一層、「けに」は「異に」で何かに比べてさらに異なるほどの意。「言ひ交はす」は歌の贈答をする、文のやりとりをするの意。結婚生活の実態が復活したとまでいえるかどうか、微妙なところでしょう。

「忘るらむ」は男の歌、「あなたが私を忘れているだろうと考える私の心に生じてくる疑心暗鬼に（はあるもの

の）以前にもまして、私の魂はつらくかなしい」の意。「ものぞかなしき」は「ものかなし」の強調表現。「かなし」に「愛し（かな）」の字をあてることも可能ですが二人の間のやりとりは復活しました。そこで「かなし」に「愛し（かな）」の字をあてることも可能ですが、やはり心に傷は残っていて「悲しい」ととる方がいいのかと迷うところ。たぶんこの両方の気持の間を揺れ動いているというのが本当のところでしょうか。その意味では、次の「中空に」の女の返歌がまるで辞世の歌のようになっているのも無理のないことだと考えられます。「中空にたちゐる雲の」が「あと」を引き出すための序詞。「中空」は空の中を漠然とさして言う語。中途半端で身の置き所のない様子。後世の清元『保名』の「恋よ恋われ中空に為すな恋」はあまりにも膾炙しましたが、その淵源はこのあたりにあるのかも知れません。とことんまで信じ合えるところまでは行かないのです。だから、「おのが世々になりければ」となるのです。この男女は結局それぞれにあたらしい伴侶を求めて、それぞれ別々の人生を歩んで行くことになったのです。この章段、

①お互いに心を交わし合っていたのに、女が突然男のもとを去る。

②しばらく時間が流れ、女の方から男に歌を読み掛け二人の縒りが戻る。

③二人は以前よりも親密な交際をする。

④しかし、二人にはそれぞれの人生があり、結局は別れてしまう。

という四のパートからなっていますが、「また〳〵」以下を蛇足とするのではなく、何気ない日常に潜む陥穽がもたらす「有為無常」をテーマとする、男女の一生を描くのがこの詞章の目的であるとするならば、やはり、この四つのパートを全て必要になってくるのではないでしょうか。『伊勢物語』の主人公には、九段を中心とする「東下り」章段のように無用者を気取る人物もいますが、それとは別に、その先に「無常」を知った人物もいた

のではないでしょうか。『伊勢物語』の最終一二五段、

むかし、おとこ、わづらひて、心地しぬべくおぼえければ、
つゐにゆくみちとはかねてきゝしかど昨日けふとはおもはざりしを

が、示しているのは、続くはずの人生がここで途切れてしまうという恒常性の破綻をきわめて端的に示すものとは言えないでしょうか。

この二一段について、片桐洋一『伊勢物語全読解』は、所載歌の成立の状況などを踏まえ、複雑な成立段階をもっているおり、「『伊勢物語』の中核となる章段、たとえば、第四段・第五段や第九段の「八橋」や「隅田川」の部分とは、かなり異なった作り方となっていると言ってよい」した上でさらに、

次に内容面から見ても、男との結婚生活を捨てて家を出て行く女が舞台回しになっているのであるが、「いさゝかなることにつけて、世の中をうしと思」って出て行った女に焦点をあてて物語るのではなく、「この女、いとひさしくありて、念じわびてにやありけん、言ひおこせたる」と記されているように、女に感情移入することなく、むしろ突き放して書いているのである。「淡々と」と言えば聞こえがよいが、かなりおざなりに、古歌や廃棄処分になりかけていた『伊勢物語』の歌「中空に…」までを利用して、「つぎはぎ」的にまとめてみた章段であるという感じが強いのである。

とまとめています。傍線部については、国立歴史民俗博物館所蔵の大島家旧蔵本の巻末に引用されている散逸本である皇太后宮越後本の章段や小式部内侍本本文をもとしたお考えであり、一応首肯出来ますので、そのまま受け入れておきます。考えたいのは二重傍線部の読みです。成立の過程は、確かに重要です。そのことを踏まえても、私にとって何よりも大切なのは、眼前のテクストここでは武田本系統の『伊勢物語』をどう読むかということです。おそらくそのことが、この片桐説に、ある種の違和感を感じてしまう遠因なのでしょう。どう表現していいかわからない男女の営みの奥に存する無常と、そこからの諦念を描いたものとしてこの詞章を読むよみ方があってもよいではないでしょうか。とすれば、「淡々と」人生の部分々々をつなぎ合わせる方法があってもいいのではないでしょうか。

七

最後は二二段です。

むかし、はかなくてたえにけるなか、猶やわすれざりけむ、女のもとより、
うきながら人をばえしもわすれねばかつうらみつゝ猶ぞこひしき
といへりければ、さればよといひて、男、
あひ見ては心ひとつをかはしまの水のながれてたえじとぞ思ふ
とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきのことゞもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜しねばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことばのこりてとりや鳴きなむ

いにしへよりもあはれにてなむかよひける。

前段は「いとかしこく思ひかはして、こと心なか」ったのにもかかわらず「いかなる事かありけむ、いさゝかなることにつけて、世の中をうしと思て、出でていなむと思って」歌を残して女が家を出た話でした。ここも「はかなくて」途絶え得てしまった男と女の話です。「はかなし」その前段の話を受けたとすれば、取るに足らないような些細なことの意ですが、末尾に「いにしへよりも」とあることから言えば、二人の愛情がしっくりとまだ深まっていないほどのかりそめの恋であったまま途絶えてしまったということでしょう。愛は育ち行くものという思いが根底にはあったのではないでしょうか。「はかなくてたえにける仲」と「うらみ」が結びつくと、現代の享受者にっとっては、別離の、例えば『長恨歌』から『源氏物語』の桐壺更衣、さらには森鷗外『舞姫』のエリスへと続く悲話が直ぐに想定されます。しかし、結末はこの章段では裏切られ、ハッピーエンドになります。「なほやわすれざりけむ」は、語り手が登場人物の心中を推量した辞。女から先に歌を寄こしたことから考えると女の心中ということになりますが、後の「さればよ」という男のことばを考えると、男女双方の心を推し量った辞と読むことができます。

女からの歌の仲の「うし」はもともとは自分の気持ちの中の堪え難さを言う語ですが、ここではさらに通ってこなくなった男への思いを込めています。「え……ね」は不可能を示し、忘れることが出来ないことを強く訴え

ます。「うらみ」はもとは「うら（心）み（見）」で相手の心の中（裏）を見るということであなたの気持ちが悲しいということ。そこから派生して「恨み」なります。「恨み」は怨念を連想しがちですが、恋に伴う様々な情念の一つで、それも強いものですが、それでも「猶ぞこひしき」と言いきるところに思いの深さがあります。

「さればよ」は、思い通りだ、それみたことかの意。男の自信に満ちた口調ですが、どうもその後の行動は、見ていると必ずしもそうではなさそうです。男の「あひみての」の歌は、『久安百首』や『百人一首』で膾炙されている崇徳院の、

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の割れても末にあはむとぞおもふ

を想起させる歌です。修辞法としては、「かはしま」に中島のある「川島」のことと「交はし間（ま）」の掛詞が用いられていますが、しかし贈られた歌への返歌としては、増歌に使われたことばも使っていないし、簡単に「絶えじとぞおもふ」などといってしまっています。「さればよ」という割りは何か安直な感じがします。駆け引きを楽しむだけの余裕がないといってしまえばそれまでですが、案外男は「まめ」であったのかもしれません。

「とはいひけれど、その夜いにけり」男には、女の方から必ず別れないでほしいといってくれるはずだという精一杯の突っ張りやせ我慢がありました。そして、案の定、女の側から、復縁を迫るような歌が贈られてきました。だから鷹揚な余裕を見せる感じの歌を贈たのですが、内心は果たしてどうだったのでしょうか。「とはいひけれど」という通り内心は心配で焦っていたのでしょう。その晩すぐに女のところに行ってしまう。ここに、男の思いの深さと同時によく言えば素直で単純、悪く言えば、女に手玉にとられてしまった男の姿がさらけ出され

ています。案外かわいい男なのです。

秋の夜の歌二首ですが、最初のが男からの贈歌。夏の夜に比べると秋は夜長。その長い夜の八千を一夜にあてて、その一夜を八千夜重ね「長時間の逢瀬を重ねたら飽く時が来るだろうか、いやそんなことはない」という反語で強調したもの。次の一首が女からの返歌。男の贈歌に「秋の夜の千夜を一夜に」と重ねています。「とりや鳴きなむ」は夜明けをつげて鳴く鳥をいい、二人の時間が短いことという。男の歌に対する軽妙な切り返し。

「いにしへよりもあはれにてなむかよひける」は語り手のまとめ。「はかなく」「うき」「うらみ」といった女の想念を越えたところにある男の心情を「あはれ」とまとめたのでしょう。

八

以上、『伊勢物語』の一七段から二二段までを読んできました。その中で気になるのは次の諸点です。

十六段　天の羽衣　　紀有常・友情・夫婦別居
十七段　年にまれなる　　和歌の贈答の軽妙さ（主が先に歌を詠む）貫之の影？
十八段　紅に　　男と女　和歌の優劣（女が先に歌を詠む）貫之の影？
十九段　風はやみ　　男と女　別れ　別の男の存在（女が先に歌を詠む）有常女
二十段　移ろふ色　　男と女　遠距離恋愛　贈答の綾
二一段　ありしよりけに　　男と女　人生は無常（女が先に歌を詠む）
二二段　千夜を一夜に　　男と女　復活もありうるか（女が先に歌を詠む）

二三段　筒井筒　　男と女　復活　愛の勝者は？

贈答歌の場合、女性の方から歌を読み掛けるのは異例だとされますが、一七段から二三段までの間では、そうとも言えないことになります。そして、また男を捨てて家を出た女は二四段「梓弓」・六十段「五月まつ花橘」や六二段「こけるから」などによって不幸になるとも言われていますが、そう強くも言えない気配があります。そうした女性に自制を求めるような章段ではなくて、もう少し、どうにもならないことはどうにもならない、男女の仲というものは、結局なるようにしかならないものだというある意味では無常観に基づく諦観によって、この章段群はできあがっているのではないかと思える節があります。一六段の友情の影にある老夫婦の別れ、そこには出家「尼になる」がありました。それを一七段では、男と女のやりとりとも気の置けない男同士の交際ともとれる形で受け、さらに有常、貫之の文脈で次に続け、男女の間の説きがたい機微を描き、別離の話から、再会の話へと続け、二三段の愛情の復活（そこにはしたたかな女の計算があるのですが）ともう一つの失われる愛の物語と続けていく。章段の構成・展開をこう読み解くこともまた可能なのではないかと思われます。

蛇足を付け加えれば、それをスタンダールの恋愛論にも比することが出来るのではとも思えてくるのです。中野孝次はスタンダールのいうところを『人生を励ます言葉』（講談社現代新書一九八八年九月）で次のようにまとめています。

一、感嘆。

二、「あの人に接吻し、接吻されたらどんなにいいだろう」等々と自問する。

三、希望―美点を検討する。

四、恋が生まれる。「恋するとは、自分が愛し、自分を愛してくれる人をあらゆる感覚を持って、出来るだけ

近く寄って、見たり触れたり感じたりすることに快感を感じることである」

五、第一の結晶作用が始まる。

恋する男の頭を二十四時間近く動くままにしておけば、諸君は次のことが起こるのを知るだろう。―ザルツブルグの塩坑では、廃坑の奥深く、冬葉を落とした木の枝を投げ込む。二三ヶ月して取り出してみると、それは輝かしい結晶で蔽われている。山雀の足ほどもない一番細い枝すら、まばゆいばかり揺れてきらめく無数のダイヤモンドで飾られている。もとの小枝は認められない。

私が結晶作用と呼ぶのは、我々の遭遇するあらゆることから発して、愛する者が新しい美点を持つことを発見する精神の作用である。

六、疑惑が生まれる。―「彼があまり安心しきっている様子を見せると、相手は無関心、冷淡、怒りをもって報いる」「彼は人生の他の快楽に転じようとするが、気がつくとそんなものはどこにもない。」

七、第二の結晶作用―「彼女が私に与える快楽は彼女のほか誰も与えてくれない」

恋の持続を確保するものは第二の結晶作用である。この間ひとは始終愛されるか死ぬかという問題と顔を突合わせている。恋が幾月も過ぎ、こうして絶えず確信を噛みしめる習慣がついた後で、どうして愛するのを止めようなどという考えを持ち得よう。性格が強ければそれだけ心変わりはしないものである。

あまり早く身を任せる女との恋には、第二の結晶作用はほとんどないわけだ。

一七段から二二段までが、この恋の解説の全て段階や相を含んでいるとは言いませんが、これらのいくつかを含んでいることは確かです。和歌が恋愛のツールであったことは今更言うまでもありますまい。そのことを含め

てやはり『伊勢物語』が恋の教科書と言われるゆえんは、一七段から二二段までのような詞章を保っているからではないかと思えてくるのです。